

遠い遠いアフリカを思うとき、いろいろな出来事と共に思い出すのはいつもそばにあったアフリカの音楽と踊りだ。今でも目をつぶって音楽をかけると、アフリカにタイムスリップしたような気になる。日本にも、多くではないがアフリカ出身のアーティストが来て、コンサートをすることがある。完成されたそのパフォーマンスは、”アフリカ“を感じるのに十分だ。そして彼らは、欧米のレコード会社に席を置きアフリカには住んでいないことが多い。アフリカ人にとって彼らは、憧れのセレブリティとして映っている。

ここでは、もっと身近にあるアフリカの歌と踊りの数々を紹介したい。

大きく言って3つに分けられると思う。ひとつは、どこの場所にも1つは絶対あるアフリカ風「ディスコ」で見られる音楽と踊りだ。ディスコといっても日本のそれとは全く違う。総合娯楽場とでも言えるだろうか、食堂、バー、喫茶店、そしてディスコがひとつの場所に収まっている。私の住んでいたナイロビから40kmのムロロンゴという地域にも5軒のディスコがあった。私はそのうちのひとつ「CAPITAL WAY(キャピタル・ウェイ)」というところに、昼夜を問わず通っていた。その店はナイロビへと続く幹線道路沿いにあり、規模的には中堅であるが、毎夜ライブがあり、常にクールなDJがいて、なによりも直送されてくる牛肉の新鮮さに定評があった。隣町が牛飼いで有名なマサイ族の町ということもあり、肉が新鮮でかつ安く食べられるのだ。

私は、朝仕事に出かける前ここに寄りよく朝食を取っていた。アツアツのミルクティーとそこで飼っている鶏から毎朝生まれる卵を焼いてもらい、それをパンにのせてもらう。日本円にして40円。従業員の彼らは、珍しいアジア人の私にいろんな話を聞かせてくれる。「昨日お客さんに大物政治家の何々がきて、しかもガールフレンドとお忍びだったよ」とか、「早魃の影響で、肉の値段が値上がりしたよ。」「DJを変えたんだけど気付いていた?」「そろそろ雨季が来そうだね。」とかかわいもないおしゃべりだ。彼らは、ディスコで働く従業員であるが、ケニアの政治や経済にはすごく敏感だ。日本のことも良く知っている。毎朝、新聞ネタはここで仕入れていた。

そして、ナイロビで新聞を買って確認する。

また、金曜日はメンバーズ・デイと呼ばれ家族で揃って過ごすのが一般的だ。当然、家族連れが多くなるのもこの曜日だ。5時頃から、そろそろと子供たちを連れた家族が集まってくる。そして焼肉を注文する。まず肉を選びにディスコの隅にある肉売り場へ、お父さんが直行する。牛肉0.5キロ200円位だ。牛一頭がさかさまにぶら下がっている。それを数キロ頼み、店員はそれをナイフでそぎ落とし、炭火でじっくりと小一時間丁寧に焼いてくれる。

その間、バーの店員が飲み物のオーダーを取りに来てくれる。ケニアでは、国産ビールのタスカ(=スワヒリ語で“象の牙”の意味)が良く飲まれる。一本100円くらい。そのほかに、ハイネケンやギネスといろいろと外国ビールも揃っている。飲みながら、DJのうまい選曲に誘われて、老若男女問わず、踊る。そして誰もが自分のスタイルで、楽しく踊っている。うまい下手なんて関係ないかのよう。そこでの曲は、アメリカのヒットチャートをにぎわすヒット曲ではない。全部アフリカの音楽だ。西アフリカのリンガラ音楽あり、南アフリカの音楽あり、地元ケニアのスワヒリポップやラップ音楽ありと。アフリカのダンスに共通するのは、腰の振り方だ。誰もがリズムに合わせてセクシーに腰をふる。真似の出来ない私は、自分の出来る範囲で踊っていると、よくDJからからかわれてマイクで「謙虚な美しさで踊るアジア代表!」とか言われて恥ずかしい思いをしたものだ。おかげでちょっとした逆の意味で有名人。「どうしたらそんなに謙虚に踊れるの?」と不思議がられる。

そして、夜もふけてくるとプロのダンサー、マジシャン、お笑い芸人やアクロバットによるショーがある。どれも、レベルはすごく高い。それらを眺めつつ、肉が運ばれてくる。ケニアに牛肉は本当においしい。塊のまま焼かれた肉を小分けに切ってもらってお皿に乗せてくれる。塩を少しつけて食べる。カチュンバリという野菜サラダと一緒に食べると尚おいしい。自然な肉の味と硬さとでも言おうか。そのまんまの味がする。私の中では、ナンバーワンの焼肉だ。

踊りつかれ、家路に着く頃には、大きな月が落ちそうなくらい近い。街灯もなく歩く家路は、真っ暗。月明かりで帰る。ディスコの中とは対照的なアフリカの夜の闇が広がっている。すぐ横にあるナイロビ国立公園と町を分けるフェンスの向こうには、野生動物の夜の狩りが行われているのだろうか？そしてスラム街を横目に歩く。ディスコの、貧困とはかけ離れた別世界が、嘘のように思えてくる。

もうひとつは、日曜日の教会のミサで歌われる歌と踊りだ。ケニアはほとんどがキリスト教徒であるけれど、宗派によって歌や踊りに特徴がある。私は、日曜ごとにいろんな教会に潜入していた。(罰当たりですみません)カトリックの教会は、ほぼどこの教会に行っても同じで、伝統的な静かな賛美歌だ。踊ることはない。しかし、プロテスタントやアングリカンとなると教会ごとにまちまちで面白い。打楽器やギターの伴奏の下、踊り続けるといったものや、叫ぶように聖書を読み、踊るといったものもある。しかし、どこに行っても彼らの抜群の歌唱力とリズム感には感動する。アメリカに渡った奴隷となった人々が歌ったゴスペルの起源であるところの力強い声とリズム感のふるさどがここにはあるのだ。楽譜を持たない彼らが奏でるメロディーは、心に刻まれているものだ。透明で力強い、美しい声。太鼓の音と、重なり合うよう響く声。聞かせる胸を打つ。歌と踊りによって、日々の苦悩や迷いが癒されていく。体からずっと、何かが向けていくのを感じる。そんな音楽の持つ力を私はそこら中で感じていた。

最後は、それぞれの民族が持つ固有の歌と踊りだろう。ケニアには53の民族がいるがそれぞれの部族語で歌われる歌と踊りがある。私の聞く機会があったのは、キクユ族(ケニア最大部族)と有名なマサイ族だ。旦那がキクユ族の出身なので、実家に共に帰ったりすると歌と踊りで出迎えてくれたりする。私にはその歌の意味は分からない。しかし、その美しいメロディーとリズムは、故郷に戻った喜びを伝えてくれる。状況

に合わせて選曲される歌は数千種類もある。語り継がれて、歌われてきたものなのだろう。親戚がナイロビの病院で亡くなった時、棺を積んだ車で一緒に村に帰ってきたことがあった。村に入るなり、彼女を迎える歌が始まった。その後彼女の死を悼む歌は、埋葬されるまで数十曲続いた。そして、アフリカの大地へ還っていく喜びの歌で最後は締めくくられた。

またマサイ族の歌と踊りは、アカペラでサバンナの草原で輪になって歌っているのを聴いたことがあった。素朴なメロディーが、自然と調和していて美しかった。人の声が楽器のような感じだ。声がつ不思議な魅力を感じさせてくれる。

付け加えるとケニアでは、ラジオの音楽番組が充実している。英語やスワヒリ語、部族語でそれぞれに放送されている。それぞれに、一日中音楽を流している音楽番組が必ずある。私は、部屋では何をするときでもラジオをかけていた。すると、隣近所から苦情が聞こえてくる。「どうしてそんな小さい音で聞いているの？みんなで聞こうとは思わないの？自分勝手ね！」というものだ。日本で近所さんに迷惑にならないよう騒音を気にして生活してる現在と反対だ。なので、くれぐれもアフリカではラジオの音はみんなに聴こえるよう大きめに。ちなみに、私は、「KISS・100」というリクエスト方式で曲がかかるラジオ番組が大好きだった。アフリカ全土のさまざまな民族の曲が一緒にかかるからだ。

音楽と踊りは生活の一部であり、人々の暮らしと共にある。時には癒されたり、忘れさせてくれたり、楽しませてくれたり。音楽の持つパワーを感じる事が出来たのも私にはアフリカが初めてだった。踊る楽しみも初めて覚えた。そんな喜びと楽しみを伝えたくて、相模原でアフリカンダンスパーティーを今までに2回ほど企画した。アフリカ人、日本人問わずいろんな国の方に来て頂いた。次回は12月に、クリスマスダンスパーティーを企画している。